

TOPICS
1

トピックス…① 異例の高値取引が続く 肉用初生牛市場

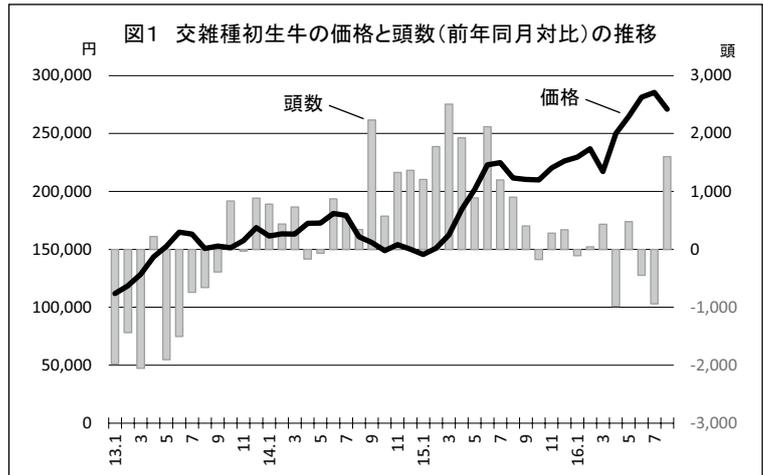
肉用初生牛の市場取引価格が高騰している。農畜産業振興機構が取りまとめた全国主要25家畜市場における平均取引価格は、交雑種が2015年5月以降20万円を上回り、乳雄も8月に10万円をわずかに下回ったものの高水準を維持している。とくに交雑種初生牛の価格は、16年4月以降25万円を上回って推移しており、肥育経営ばかりではなく、搾乳後継牛の需給にも大きな影響を及ぼすことが懸念されている。

近年における肉用初生牛の市場取引価格をみると、交雑種は2011年12月の8.2万円を底値とし、その後はほぼ上昇傾向を示している。とくに、取引頭数が急増し、取引価格が一時的に低迷した14年秋を過ぎた頃からの取引価格の上昇は顕著であり、16年6月～7月には28万円を上回った（図1参照）。

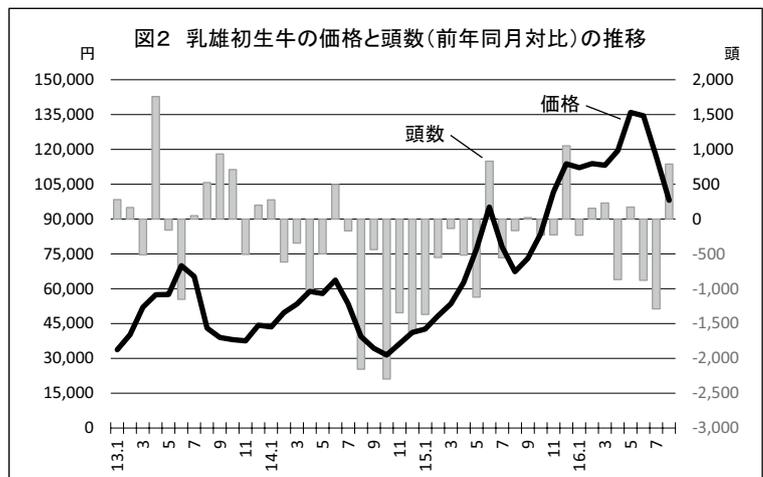
一方、乳雄初生牛の市場取引価格は、水準こそ違うものの、交雑種初生牛のそれとよく似た変化を示している。2011年12月に2.4万円の底値となった乳雄初生牛の取引価格は、その後は14年秋まで上昇、下降を繰り返していたが、それ以降は上昇傾向に転じ、16年5月～6月には13万円を上回った。なお、14年秋に乳雄の取引頭数が大きく減少したにも関わらず、その取引価格が低迷した要因としては、交雑種の取引頭数の急増にともなう取引価格の低下があげられる（図2参照）。

初生牛市場でみられる異例の相場展開については、市場関係者の間から、肥育経営の先行きを懸念する声が聞かれる。つまり、2016年に出荷時期を迎える肉牛の初生牛が導入されたのは、その取引価格が低迷していた2年前の夏から秋にかけてであり、肉牛出荷による差益は大きい。したがって、初生牛の市場取引価格が高騰していても、旺盛な購買行動は持続している。しかし、肉用初生牛の取引価格が高水準で推移した場合、2年後の肉牛出荷による差益が確保される保証はない。

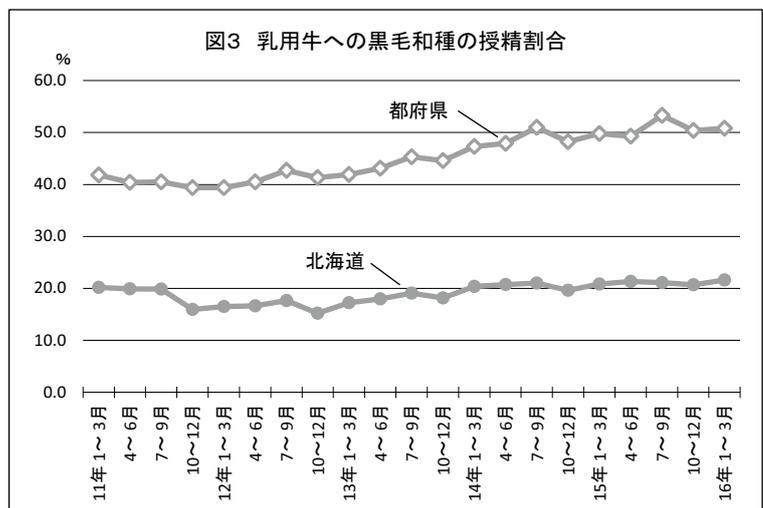
また、肉用初生牛、とくに交雑種の市場取引価格の高騰は、乳用牛への黒毛和種の授精割合を増加させ（図3参照）、搾乳後継牛の供給量を減少させる一因となっている。すでに、搾乳後継牛の取引価格は高水準で推移しており、搾乳牛の更新にともなう酪農経営への負の影響が増加している。



資料：農畜産業振興機構調べ



資料：農畜産業振興機構調べ



資料：日本家畜人工授精師協会「乳用牛への黒毛和種の交配状況」